

## 保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試み

—保育者の幼少期の経験との  
関連性を手掛かりに—  
小川房子 石田由紀子 兼間和美



保育者の幼少期の経験とその場面やその子を理解する際の捉え方との関連性を明らかにすることを目的として2022年度に3名で研究をはじめ、2023年度は、多様な捉え方の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試みに取り組んだ。きっかけは市販の教材に収められていた2学期開始直後の4歳クラスの男児（以下A児と表記）が昼食を食べずに座っている場面でのナレーションに違和感を覚えたことである。その場面では、「お弁当を食べない」とA児が言っていることが登園時に母親から担任保育者に伝えられており、実際に昼食の時間にA児は弁当を広げることも、出すこともせず、時には他児が食べ物を口に運ぶのを目で追う姿が見られた。教材ではそのA児の姿を「抵抗している」と解説していた。本当に抵抗しているのだろうか。保育歴30年超の二人の大先輩に意見を求めるとともに、パイロットスタディに取り組んだ。それが本研究の初めの一歩である。幼児の心情を理解しようと試みる際、幼少期の体験として自立せざるを得なかった研究対象者は、A児の自立に向けた視点でその場面を読み取り、共働きで

寂しさを感じていた研究対象者は、母子関係に焦点を当てて心情を読み取っていた。安定した情緒で園生活を過ごすことができなかった研究対象者は、A児の精神面を推察していた。つまり、場面や心情の読み取りと幼少期の経験には関連性があるということである。また、他の場面を視聴した結果では、保育者と幼児が心を通わせながら過ごしている場面や幼児の情緒が安定していると見て取れる場面では各研究対象者の言語記録には共通点が多く見られる一方で、幼児が課題に直面している場面においては相違点が多く見られることもわかった。そこで、乳幼児一人一人が保育者に理解され安心・安全な居場所を確保することが乳幼児の「しあわせをカタチ」にするためには必要不可欠であると考えて2022年度の研究に取り組んだ。そして、研究を進める過程で早期離職や不適切保育が社会的問題となる現在の幼児教育・保育において、乳幼児のしあわせのためには、保育者のしあわせが不可欠であると考えてに至り、2023度も引き続き多様な読み取りに焦点を当てつつ、保育者同士が相互理解を図り、心理的安全性と同僚性を構築することが保育者の「しあわせをカタチ」にすることであり、それが乳幼児の「しあわせをカタチ」にすることにもつながると考えて研究を継続した。

しあわせ研究所のおかげで学外の研究者と共に研究ができることに感謝し、現場に還元できる研究をしていきたい。